2023年1月31日　建設通信新聞

『TerraceAR』ユーザー数が増

ネクステラス

2023年度のBIM／CIM原則化を背景に、コンサルタント会社が発注者と打ち合わせをする際に完成予想図として活用するケースや建設会社での現場活用など、3次元モデリングを中心にBIM／CIMと向き合おうとする流れが強まる中、19年に木下大也代表取締役CEOは、北海道で建設ICTスタートアップ企業『NexTerrace（ネクステラス）』を立ち上げた。木下氏は「各企業からの個別要望に応えながら、3次元技術の延長線上にあるARやVRを活用して頂き建設会社のDX、現場のデジタル化を後押ししたい」と話す。

同社では、20年11月に建設業特化型ARアプリ『TerraceAR』をリリースした。3次元モデルを現況に照らし出すもので、iPhoneやiPadなどの情報端末を現場にかざすと、どのように構造物が配置されるかが確認できる。Terrace（照らす）ツールという独自の機能を搭載し、地中や水中にある見えない構造物を遠近感や立体感を保って、見たい部分を『照らし』ながら確認できるのが特徴となっている。

木下CEO

北海道では、一二三北路（札幌市）が積雪時の現場管理ツールに活用するなど、手軽なARツールとして評判が広がっており、今年度に入って全国で大幅にユーザー数が増加している。さらに、札幌市のDXモデル創出補助金を活用し、雪にスマートフォンを向けるだけで、堆積量やダンプの積載量を素早く解析できるアプリも開発中で、あらゆる角度から現場のDXを後押しする。

このほか、デジタル技術を活用し、こぶし建設（北海道岩見沢市）と共同開発したAI姿勢検知システム『AI's（アイズ）』が現場で活用されている。

重機の死角などにAIカメラを取り付けることで、危険な状況を察知した合図者の合図（ジェスチャー）をAIが理解し、オペレーターに知らせる補助システムとして、現場での実証実験を経て開発に至った。「人がいることを警告するだけではなく、合図者が能動的に意思を発信・伝達できることが本システム最大の特徴」と木下氏は話す。

このシステムは『人の姿勢』や『ジェスチャー』といった従来アナログであった情報をデジタル化することで、ジェスチャーコミュニケーションを効率化できる。

木下氏は「建設業が一品特注生産であることを踏まえ、現場の困りごとを見極め、目の前の小さな改善の積み重ねと、わくわくするような発想が課題解決に生きていく」と、建設DXの推進に向けた原動力を語る。

ユーザーの「手軽さが突出している」との声を踏まえながら、今後は新たなアプリやツールの開発を目指す。それぞれのアプリについては、さらにバージョンアップを予定している。「引き続き、調査測量・設計・施工・維持管理それぞれの現場の方々との連携を大切に個別の要望に応えながら、心が震えるほどのわくわくする感性、感動する取り組みをお客さま、パートナーさまとともに体現したい」と先を見据える。